

## 灰色の月

とうきょうえき や ね ほろう た  
 東京駅の屋根のなくなった歩廊に立って  
 いると、<sup>かぜ</sup>風はなかったが、<sup>ひ</sup>冷え<sup>び</sup>冷えとし、  
<sup>き</sup>着てきた<sup>ひとえが</sup>一重外套でちょうどよかった。

つ ふたり さき き  
 連れの二人は先に来たうえのまわりへの  
<sup>ひとり</sup>り、あとは一人、<sup>しながわ</sup>品川<sup>ま</sup>まわりを待った。

うすぐも そら はいいろ つき にほんばし  
 薄曇りのした空から灰色の月が日本橋の  
<sup>やけあと</sup>焼跡を<sup>て</sup>ぼんやり照らしていた。

つき とおか ひく ちか  
 月は十日ぐらいか、低い、それになぜか近  
<sup>み</sup>く見えた。<sup>はちじはん</sup>八時半ごろだが、<sup>ひと</sup>人が<sup>すく</sup>少なく、  
<sup>ひろ</sup>広い<sup>ほろう</sup>歩廊が<sup>いっそうひろ</sup>一層<sup>かん</sup>広く感じられた。

とお でんしゃ あたまあかり み  
 遠く電車の頭燈が見え、しばらくすると  
<sup>ふい</sup>不意に<sup>こん</sup>近づいて<sup>き</sup>来た。

<sup>しやない</sup> 車内はそれほど<sup>こ</sup>込んでいず、<sup>わたし</sup> <sup>はんたいがわ</sup> 私は反対側  
<sup>いりぐちちか</sup> の入口近くに<sup>こし</sup> 腰かけることができた。<sup>みぎ</sup> 右に  
<sup>ごじゅうちか</sup> 五十近いもんぺ姿の女がいた。

<sup>ひだり</sup> 左には<sup>しょうねんく</sup> 少年工と思われる<sup>じゅうしちはちさい</sup> 十七八歳の  
<sup>こども</sup> 子供が<sup>かた</sup> 私の方を<sup>せ</sup> 背し、<sup>ざせき</sup> 座席の<sup>はし</sup> 端の<sup>そでいた</sup> 袖板がな  
<sup>いりぐち</sup> いので、入口の方へ<sup>ほう</sup> 真横を<sup>まよこ</sup> 向いて<sup>こしか</sup> 腰掛けて  
 いた。

<sup>こども</sup> その子供の<sup>かお</sup> 顔は<sup>はい</sup> 入って<sup>き</sup> 来た<sup>とき</sup> 時、<sup>み</sup> ちょっと見  
<sup>め</sup> たが、眼をつぶり、<sup>くち</sup> 口は<sup>あ</sup> だらしなく開けた  
<sup>じょうたい</sup> まま、上体を<sup>ぜんご</sup> 前後に<sup>おお</sup> 大きく<sup>ゆ</sup> 揺すっていた。

<sup>ゆ</sup> それは揺すっているのではなく、<sup>しんたい</sup> 身体が<sup>まえ</sup> 前  
<sup>たお</sup> に倒れる。居眠りにしては<sup>いねむ</sup> 連続的<sup>れんぞくてき</sup> なのが  
<sup>ぶきみ</sup> 不気味に<sup>かん</sup> 感じられた。

わたし ふしぜん ていど こども あいだ  
 私は不自然でない程度に子供との間を  
 空けて腰かけていた。

ゆうらくちょう しんばし だいぶこ かいだ  
 有楽町、新橋では大分込んできた。買出し  
 の帰りらしい人も何人かいた。

にじゅうご けっしょく まるがお わかもの せ お  
 二十五の血色のいい丸顔の若者が背負っ  
 てきた物別おおきなリュックサックを  
 しょうねんく よこ お こしかけ つ  
 少年工の横に置き、腰掛に掛けて、それに  
 また た  
 跨ぐようにして立っていた。

はいご りゅっくさっく  
 その背後から、これもリュックサックを  
 せ お よんじゅう おとこ ひと お  
 背負った四十ぐらいの男が人に押され  
 ながら、まえ わかもの のぞ  
 ながら、前の若者を覗くようにして、

の い へんじ  
 「載せてもかまいませんか」と云い、返事  
 ま せなか に お  
 を待たず、背中の荷を下ろしにかかった。

「<sup>ま</sup>待<sup>くだ</sup>って下<sup>の</sup>さい。載<sup>こま</sup>せられると困<sup>こま</sup>るものが  
ある<sup>わかもの</sup>んです」若<sup>じぶん</sup>者は自<sup>に</sup>分の荷<sup>かば</sup>を庇<sup>かば</sup>うように  
して<sup>おとこ</sup>男<sup>ほうふりかえ</sup>の方<sup>ほうふりかえ</sup>振返<sup>ほうふりかえ</sup>った。

「<sup>す</sup>そうですか。済<sup>おとこ</sup>みませんでした」男<sup>おとこ</sup>は  
ち<sup>あみだな</sup>ょう<sup>み</sup>つと網<sup>あ</sup>棚<sup>の</sup>を見<sup>の</sup>上げ<sup>の</sup>たが、載<sup>の</sup>せられそ  
う<sup>せま</sup>もない<sup>せま</sup>ので、狭<sup>しんたい</sup>いと<sup>ひね</sup>ころ<sup>ひね</sup>で身<sup>しんたい</sup>体<sup>ひね</sup>を捻<sup>ひね</sup>り、  
それ<sup>せ</sup>を<sup>お</sup>また背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>って<sup>お</sup>しま<sup>お</sup>った。

若<sup>わかもの</sup>者は<sup>き</sup>気<sup>き</sup>の<sup>どく</sup>毒<sup>どく</sup>に<sup>おも</sup>思<sup>おも</sup>った<sup>わたし</sup>ら<sup>わたし</sup>しく、私<sup>わたし</sup>と  
少<sup>しょうねん</sup>年<sup>く</sup>工<sup>あいだ</sup>戸<sup>に</sup>の<sup>はんぶん</sup>間<sup>はんぶん</sup>に<sup>お</sup>荷<sup>お</sup>を<sup>お</sup>半<sup>お</sup>分<sup>お</sup>か<sup>お</sup>け<sup>お</sup>て<sup>お</sup>置<sup>お</sup>こう<sup>お</sup>と  
云<sup>い</sup>った<sup>い</sup>が、

「<sup>おも</sup>いい<sup>おも</sup>んです<sup>おも</sup>よ。そ<sup>おも</sup>んな<sup>おも</sup>に<sup>おも</sup>重<sup>おも</sup>くない<sup>おも</sup>ん<sup>おも</sup>です  
よ。邪<sup>おろ</sup>魔<sup>そう</sup>に<sup>お</sup>なる<sup>お</sup>から<sup>お</sup>ね。お<sup>お</sup>ろ<sup>お</sup>そ<sup>お</sup>う<sup>お</sup>か<sup>お</sup>と<sup>お</sup>思<sup>お</sup>っ  
た<sup>い</sup>が、<sup>い</sup>いい<sup>おとこ</sup>ん<sup>あたま</sup>です<sup>あたま</sup>よ」そ<sup>い</sup>う<sup>おとこ</sup>云<sup>あたま</sup>つて<sup>あたま</sup>男<sup>あたま</sup>は<sup>あたま</sup>頭<sup>あたま</sup>  
を<sup>さ</sup>下<sup>み</sup>げ<sup>わたし</sup>た。見<sup>きもち</sup>て<sup>おも</sup>い<sup>おも</sup>て、私<sup>おも</sup>は<sup>おも</sup>気<sup>おも</sup>持<sup>おも</sup>よ<sup>おも</sup>く<sup>おも</sup>思<sup>おも</sup>っ  
た。

いとと　ひと　きもち　だいぶか  
 一トころとは人の気持も大分変わってきた  
 と思った。

はままつちょう　しながわ　き　お  
 浜松町、それから品川に来て、降りる  
 ひと　の　ひと　ほう　おお  
 人もあったが、乗る人の方が多かった。  
 しょうねんく　なか　いぜんしんたい　おお  
 少年工はその中でも依然身体を大きく揺  
 すっていた。

「まあ、なんて面めんをしてやがるんだ」とい  
 う声こえがした。それを云いったのは会社員かいしゃいんとい  
 うようなよんごにん四五人の一人ひとりだった。

つ　みな　いっしょ　わら  
 連れの皆も一緒に笑いだした。

わたし                    しょうねんく      かお      み  
 私からは少年工の顔は見えなかったが、  
 かいしゃいん            い  
 会社員の云いかたが可笑しかったし、  
 しょうねんく      かお      おそ  
 少年工の顔も恐らく可笑しかったのだろ  
 う、車内にはちょっと快活な空気ができた。

とき      まるがお      わかもの                    おとこ      かえり  
 その時、丸顔の若者はうしろの男を顧み、  
 ゆびさき      じぶん      い      ところ      たた  
 指先で自分の胃の所を叩きながら、

いっぽてまえ                    こそえ  
 「一歩手前ですよ」と小声で云った。

おとこ                    おどろ                    かぜ                    だま  
 男はちょっと驚いた風で、黙って  
 しょうねんく      み  
 少年工を見ていたが、

「そうですか」と云った。

わら                    なかま      すこ      へん      おも  
 笑った仲間も少し変に思ったらしく、

びょうき  
 「病気かな」

よ  
 「酔ってるんじゃないのか」

こんなことを云っていたが、一人が、  
 「そうじゃないらしいよ」と云い、それで

皆にも通じたらしく、<sup>きゅう</sup>急に<sup>だま</sup>黙ってしまった。

<sup>ち</sup>地の<sup>わる</sup>悪い<sup>こういんふく</sup>工員服の<sup>かた</sup>肩は<sup>やぶ</sup>破れ、<sup>うら</sup>裏から  
<sup>てぬぐい</sup>手拭で<sup>あ</sup>継ぎが<sup>あ</sup>当ててある。<sup>うしろまえ</sup>後<sup>かぶ</sup>前に<sup>かぶ</sup>被った  
<sup>せんとうぼう</sup>戦闘帽の<sup>ひさし</sup>廂の<sup>もと</sup>下のよごれた<sup>もと</sup>細い首筋が寂  
 しかった。

<sup>しょうねんく</sup>少年工は<sup>しんたい</sup>身体を<sup>ゆ</sup>揺すらなくなった。そして、  
<sup>まど</sup>窓と<sup>い</sup>入り口の<sup>ぐち</sup>間にある<sup>あいだ</sup>一尺ほどの<sup>いちしゃく</sup>板張  
<sup>ほお</sup>にしきりに<sup>す</sup>頬を<sup>す</sup>擦りつけていた。

<sup>ようす</sup>その<sup>こども</sup>様子がいかにも<sup>こども</sup>子供らしく、<sup>ぼんやり</sup>ぼんやり  
<sup>あたま</sup>した<sup>あたま</sup>頭で<sup>いたばり</sup>板張を<sup>だれ</sup>誰かに<sup>かそう</sup>仮想し、<sup>あま</sup>甘えてい  
 るのだという<sup>ふう</sup>風に<sup>おも</sup>思われた。

<sup>おい</sup>「オイ」<sup>まえ</sup>前に<sup>た</sup>立っていた<sup>おお</sup>大きな<sup>おとこ</sup>男が  
<sup>しょうねんく</sup>少年工の<sup>かた</sup>肩に<sup>て</sup>手を<sup>い</sup>かけ、「どこまで行くん

だ」と訊いた。少年工は返事をしなかったが、また同じことを云われ、

「上野へ行くんだ」と物憂そうに答えた。

「そりゃあいけねえ。あべこべに乗っちゃったよ。こりゃあ、渋谷の方へ行く電車だ」

少年工は身体を起こし、窓外を見ようとした時、重心を失い、いきなり、私に寄りかかってきた。

それは不意だったが、後でどうしてそんなことをしたか、不思議に思うのだが、その時はほとんど反射的に寄りかかってきた少年工の身体を肩で突返した。

これは私の気持ちをまったく裏切った動作で、自分でも驚いたが、その寄りか

<sup>とき</sup> <sup>しょうねん</sup> <sup>しんたい</sup> <sup>ていこう</sup>  
 かられた時の少年の身体の抵抗があまり  
<sup>すく</sup> <sup>いっそうき</sup>  
 に少なかったことで一層気の毒な想いを  
 した。

<sup>わたし</sup> <sup>たいじゅう</sup> <sup>いま</sup> <sup>じゅうさんかんじさんびやくもんめ</sup> <sup>へ</sup>  
 私の体重は今、十三貫二三百匁に減っ  
<sup>しょうねんく</sup>  
 ているが、少年工のそれはそれよりもはる  
<sup>かる</sup>  
 かに軽かった。

<sup>とうきょうえき</sup> <sup>—のりこ</sup> <sup>き</sup>  
 「東京駅でいたから、乗越して来たんだ。  
<sup>の</sup> <sup>わたし</sup> <sup>き</sup>  
 どこから乗ったんだ。」私はうしろから訊  
 いてみた。

<sup>しょうねんく</sup> <sup>む</sup>  
 少年工はむこうを向いたまま、  
<sup>しぶや</sup> <sup>の</sup> <sup>い</sup> <sup>だれ</sup>  
 「渋谷から乗った」と云った。誰か、  
<sup>しぶや</sup> <sup>いちと</sup>  
 「渋谷からじゃ一トまわりしちやったよ」  
<sup>い</sup> <sup>もの</sup>  
 と云う者があった。

<sup>しょうねんく</sup> <sup>がらす</sup> <sup>がく</sup> <sup>そうがい</sup> <sup>み</sup>  
 少年工は硝子に額をつけ、窓外を見よ  
 うとしたが、すぐやめて、ようやく聴きと  
<sup>き</sup>

れる<sup>ひく</sup>低い<sup>こえ</sup>声で、  
「どうしても、かまわねえや」と云った。

<sup>しょうねんく</sup>少年工のこの<sup>どくご</sup>独語は<sup>あと</sup>後まで<sup>わたし</sup>私の<sup>こころ</sup>心に  
のこ  
残った。

<sup>ちか</sup>近くの<sup>じょうきゃくたち</sup>乗客達も、もう<sup>しょうねんく</sup>少年工のこと  
には<sup>ふ</sup>触れなかった。どうすることもできない  
と思うのだろう。

私もその一人で、どうすることもできない  
気持ちだった。

<sup>べんとう</sup>弁当でも<sup>も</sup>持っていたら<sup>じしん</sup>自身の<sup>きやす</sup>気休めにや  
ることもできるが、<sup>きん</sup>金をやったところで、  
<sup>ひるま</sup>昼間でも<sup>だめ</sup>駄目かも<sup>し</sup>知れず、まして<sup>よるきゅうじ</sup>夜九時で  
は<sup>く</sup>食<sup>もの</sup>物など<sup>え</sup>得る<sup>あて</sup>あては<sup>あんとん</sup>なかった。暗澹た  
<sup>きも</sup>る<sup>しぶやえき</sup>気持ちのまま<sup>でんしゃ</sup>渋谷駅で<sup>お</sup>電車を降りた。

<sup>しょうわにじゅうねんじゅうがつじゅうろくにち</sup>  
昭和二十年十月十六日のことである。